

20歳で戦死した兄の悲願

2016

今言わなければ

終戦時、僕は5歳でした。1945年に出征した20歳で戦死した兄の記憶は今も鮮明です。兄は東京の渋谷税務署に勤めて間もなく召集され、満州に渡りました。廊下のガラス戸に字を書いて教えてくれた兄でした。カタカナを習得して、ひらがなに進んだところで兄は召集されました。

作家 **志茂田景樹**さん



しもだ・かげき
1940年生まれ。
『黄色い牙』(直木賞)、『汽笛』(声)
『キリンがく』(多読日)
『よいか』(著書)、『よいか』(著書)
『よいか』(著書)、『よいか』(著書)

われ駄まで見送って行ったこと、母は家の木戸口からそっと顔をのぞかせていたこと、万歳三唱する兄と目が合うと、澄んだ寂しい表情になったこと。思い出します。

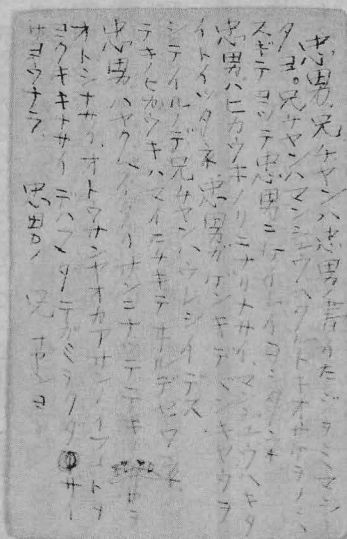
兄から僕には一通だけ、軍事郵便ではがきが届きました。へオトウサ

23日から24日にかけての夜半だったそうです。おかしいじゃないですか。戦争は15日に終わっているのに。上級司令部からの停戦命令がなかったために降伏できず、ソ連軍に包囲されたんです。

99年「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、読み聞かせは全国で1800回を超えました。戦争の話もしますが、最近の子どもたちは興味津々で聞いています。多発する紛争やテロから、戦争を身近に感じているのかもしれない。竹やりでわら人形を突き刺す訓練や、焼夷弾を消すためのバケツリレーの様子を話すと、その滑稽さを笑う子

もいます。子どもの方が冷静です。
一人一人が声を板切れの入った白木の箱が届き、兄の部屋で声をたてずに泣いていた母を思い出します。あの悲惨でむごい戦争を経験して、「二度と戦争はすまない」とみんなが思ったんです。その初心をかみしめる時ではないでしょうか。戦前、渡辺白泉が詠んだ「戦争が廊下の奥に立つてゐた」という状況を今また感じます。言論と表現の自由が損なわれている愚劣しさがある。日本を戦争する国にしないために、一人ひとりが声をあげる時だと思えます。

聞き手 平川由美
写真 後藤 淳



戦地から届いた兄のはがき